子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2010年11月 NO.158

「waiting am11:57」 阿部鉄太郎

〈もくじ〉

ブーラブラが仕事の源泉 …… 岡橋保積 2
昆虫少年のライフワーク …… 森本惠一郎 3
「アール・ブリュット」ってご存知ですか。 …… 小林瑞恵 4～5
タヌキに化かされて!? —秘境（？）の盆踊りレポート …… 野村 圭 6～7
冬の風物詩・ミノムシはどこに行った？ …… 荒川 良 8～9
鉄道っておもしろい！(5) …… 大内雅博 10
言葉の現場から24 「竜馬がゆく」のなぞを読み解く …… 広井 護 11
高知市文化振興事業団 9月～10月の事業から …… 12～13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

ブーラブラが仕事の源泉

岡橋保積

高知にきて六カ月、もう六カ月たってしまったのか…。早いもんだなあ。

新緑の大歩危小歩危を揺れる土讃線に乗って、前任地の九州は大分・中津市からやってきたのが四月二十日。単身赴任歴十一年、西日本を主に九カ所の異動で荷作りも手慣れたもの。快適なオンリー生活をエンジョイしている。

いろんなところでいろんな方と仕事ができるのは幸せなこと。さらに各地の美味しいものが味わえて最高。と、こんな私ですから実に短期間で各地のいいところを自分の感覚で掴み、物にし、でも「こうじゃないかな」「いやこうだよ」と自問自答しながら仕事をする毎日です。

着任即、比較地域、比較消費者、比較文化を肌で実感し、形にして（集客・商品イベント、専門店様とのミーティング）仮説を作り、実務を遂行。十分知らないというハンディキャップはあるものの、やはり同じ日本人。同じものが求められている。

ブーラブラで見つけたもの１
〈室戸ジオパークの岩の隆起〉

転勤族ゆえに、働く、食べる、飲む…すべての行為をいつも比較してしまう。鰹の消費量が全国平均の七倍の高知県。鶏の唐揚げの消費量日本一の大分県中津市。その地で生活すれば、データが単なる数字から「なるほど」に変わるのです。

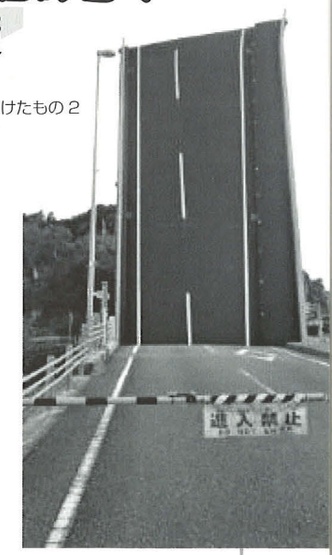
この「なるほど」を確信にするための人間ウォッチ、お店ウォッチ、地形ウォッチが私の休みの日課です。ここ高知でも、休日はいつも街中、郊外、山中とくまなくブーラブラしているのです。家族が住む神戸と比べ、自分勝手な基準でブーラブラするのも転勤族の楽しみです。それで感じた、高知の不思議。

①昼間から中心街の居酒屋で飲める
②川が市内を東西に流れている
③街に煙突がない

①は暮らしてみなければわからない高知ののどかな一面を垣間見た感じ。現在進行形と現在完了形の入り混じった会話を平然と交わしながらのどかな時間を過ごしている。「龍馬伝」でも使われているけれどやはり生の土佐弁は心地良い。

②電車道を中心に南北一キロの間に川が三本、東西に悠然と流れている。神戸の川はすべて南北に流れているのにまったく不思議！

③神戸では街中でも煙突が見えるが、筆山、五台山の上から見ても煙突がない。高知市はクリーン都市なんだ。県庁所在地で県内生産額のおよそ半分を占めているというイメージとのギャップもあり、これには驚いた。農業・観光が主要産業なんだなあ。しかしその産業の裾野の広がりのなさに致命的なものを感じてしまう…。



ブーラブラで見つけたもの２
〈夜須の港の道路〉

家を出て無鉄砲に東西南北。あてなく車、歩き、でブーラブラ。「え！これはなんだ？」というのに遭遇する楽しさ。偶然と漠然が悠然とぶつかって安らぎを生み出す。そんな偶然を見つけたときに閃きが出てくるのです。こうすれば高知の方の興味の増幅に寄与できるのではないかな？これはきっと高知のお客様に受け入れられるだろう！と、ブーラブラの中から確信を持ち、パワーが生まれてくるのです。

これがイオンモール高知を支えているパワーのひとつなのです。このような身近な生活感の情報集積が私どもイオンモール高知の原動力になっているのです。

二千人強の従業員の集合体であるイオンモール高知。これからも、日々のお客様の変化を十分キャッチできる感性を磨き、さらに高知のお客様に愛されるショッピングモール運営を続けてまいります。

高知の方々に本当に「愛されて十年」。さらにより良いイオンモール高知を地域のみなさまと一緒に作っていきたいと思っております。これからも末永くイオンモール高知をご愛顧くださることをお願い申しあげます。

（おかはしほづみ／イオンモール高知ゼネラルマネージャー）

昆虫少年のライフワーク

森本惠一郎

今年の八月、「森からのおくりもの」と題して高知市で個展を開いた。二年前山梨県工業技術センターを定年退職してから個展をしたことはあったが、生まれ故郷の高知では初めてである。

メタルクラフトのジャンルでの個展は少ないらしく、来場してくれた方の多くから好評を得、良かったと思っている。

この個展を開くにあたっては、トンボの研究者である濱田康先輩に大変お世話になった。高知を離れて四十年以上たち何の情報も持っていなかった私に、新聞社への紹介など色々とアドバイスをいただき、感謝している。

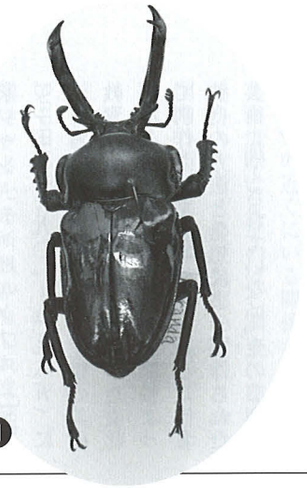


写真１

私は六十三歳になった今でも、昆虫採集を行っている。

さかのぼれば、中学生になったとき本格的な採集道具をそろえ、夏休みにかけて標本作りをした。そのきっかけは高知市内に今では信じられない採集場所があったからである。

現在弘化台の中央卸売市場となっている場所は、全部材木置き場であった。そこには高知県じゅうで伐採された材木が集められ、その木を棲みかとしていたり食用にしている虫たちも同時に集まっていた。遠くの山に行かなくても、市内に居ながらにして山地の虫が採集できた。

ここで四国未記録種のカミキリムシ等を採集したことが、はまってしまった大きな原因である。それ以来、甲虫（こうちゅう）を主に集めたにもかかわらず標本箱は年を追うごとに増え、今では標本ダンス二つに収まりきらず部屋の大半を占領しつつある。

ニジイロクワガタに出会ったのは一九九〇年頃、ちょうどバブルの頃だったと思う。クワガタムシとは思えないこの美しい色は何だろう（写真１）。

東京のインセクトフェアで、とんでもない値段でこのニジイロクワガタの標本が売られていた。何年かたってやっと標本を手に入れたとき、何ともいいようのない満足感を味わったのを今でも覚えている。

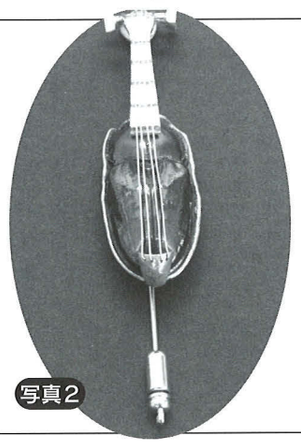


写真２

現在インターネット上で、ペットとして安価で売られているのを見ると、驚きを隠せない。実際死んでしまって手足がとれ、標本として価値がなくなったものは、簡単に捨てられてしまっている。何とかこれを利用できないかと思い取り組んだ作品がこれ（写真２）である。

玉虫厨子に代表されるように、昆虫の羽を利用した工芸品は昔から作られている。古人も昆虫の羽を美しいと思い、その美しさを楽しもうとした現れであると思う。千年以上もたち、厨子は残っているが、羽は剥落している。今の技術でもって、千年は持たなくてもせめて五百年は持たせたいとの願いで制作した。今後虫の種類を増やして、様々なバリエーションを考えていきたいと思っている（写真３）。

私は自然をテーマにした物作りを行ってきたが、今ではそれがライフワークとなっている。作品の中から、昆虫の鳴き声等を感じ取っていただければ最高である。

「使って飽きがこない」「愛着がわく」などと思っていただけることを目標に物作りに励んでいきたい。

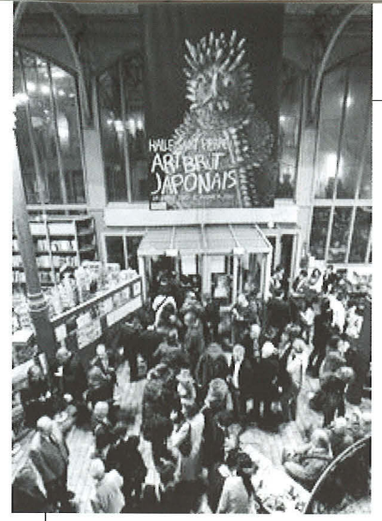
（もりもとけいいちろう／工房 蟲の籠・山梨県甲府市在住）

写真３

工房 蟲の籠　http://www.mushinokago.jp/

「アール・ブリュット」ってご存知ですか。

小林瑞恵



アール・ブリュット ジャポネ展オープニング風景

「アール・ブリュット（Art Brut）」とは、フランス人画家ジャン・デュビュッフェ（Jean Dubuffet 一九〇一―一九八五）により考案された言葉で、正規の美術教育や伝統・流行などといった文化潮流とはまったく無縁の文脈によって制作された芸術作品を指し、作者独自の方法と発想によって作られた芸術（加工されていない「生（き）の芸術」）です。

アール・ブリュット作家の中には、知的または精神などの障害のある作家も多く含まれ、人が持つ表現の可能性の凄みをまざまざと感じさせてくれる芸術分野の一つです。欧米諸国ではアール・ブリュットを扱った数多くの展覧会が開催され、また作品の収集・保存・研究が進んでいます。

アール・ブリュット作家の多くは、作品を発表することや社会から評価されることに関心が向かいません。ただひたすらに「創る」「描く」という行為に集中し、自身の内側から湧きあがる衝動のままに創作に向かっています。故にアール・ブリュット作品は作家の独自性が特化して見えるのが特徴です。

アール・ブリュットの作品群を一度でもご覧いただければ体感できますが、ときにその制作は凄まじいほどのエネルギーと途方もない時間軸の中で行われており、たまたま美術家などに発見・収集された作品の物語をひもとくと、その作家の壮絶な人生までをも語り、観る人に衝撃と感動を与えます。

私も、初めてスイスのアール・ブリュット・コレクション（※1）で作品を目の当たりにしたときは、身震いがするほどの驚きと、人が表現することの無限大の可能性に、瞬きを忘れてしまうほど見入ったのをよく覚えています。

そのコレクションの中に、とても繊細なディテールで編みこまれた黄ばみがかった白いウエディングドレスがありました。凸凹と不規則で緻密な模様を繰り返し、複雑に形成されたそのウエディングドレスは、不規則さからの不安定とも安定とも言えない歪みがあるのに息をのむような美しさのあるドレスでした。

このウエディングドレスを制作した作家は、Marguerite sirvins（一八九〇―一九五七）という女性で、アール・ブリュット作家の中でも有名な一人です。彼女は、二十六歳の時に発病し精神病院に入院しました。彼女の夢は、結婚をすることだったのですが、入院することになり、その望みが叶わなくなった彼女は自分のベッドのシーツから糸を一本ずつつみとり、ドレスを編み始めました。

誰かに編み方を教わったわけでもなく、モデルとなるものもなく編んでいったため、あの何とも言い難い緻密で不規則なディテールのドレスが生まれたのです。彼女は、いつか叶えたい結婚式に向かってただひたすらに編んでいき、ウエディングドレスを創ることでいつかの「明日」へ常に向かっていたのです。彼女にとってドレスを創るという行為が「生きる」ことへの欲求だったのだったのでしょう。

彼女はついにそのウエディングドレスを着ることなく亡くなってしまったのですが、制作期間を見る限りでは、亡くなるまでの約四十一年間、編み続けていたようです。アール・ブリュット〈生の芸術〉と称されるこれらの作品の魅力は、そこに作家の人生や生命力が圧倒的なエネルギーで凝縮されているため、観る者の心を引き込んでしまうのだと思います。

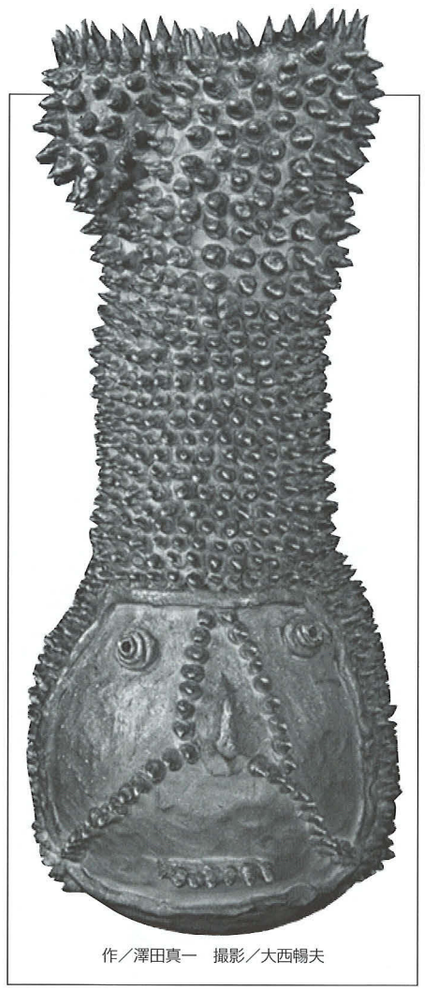
日本では、欧米から少し遅れ、近年アール・ブリュットに関する展覧会が多数開催され、また報道などでも目にすることが増え、関心が高まりつつあります。私もここ四年ほど日本の各地を巡り、さまざまな作品や作家に出会ってきました。

アール・ブリュット作品は、前述のように、作家自身が作品を発表することや社会から評価されることに関心が向かないため、発掘するのには作家の近くにいる関係者の情報やまた実際に足をのばし調査に出向くほかありません。発掘の困難さから、国内外問わず、誰に知られることなく作品と見られることもなく捨てられてしまったり、埋もれている作品が多数あるということです。そこもアール・ブリュットがアール・ブリュットたる所以かもしれません。アール・ブリュット作家と出会うのは、それこそ方位磁石も利かない密林を歩き、宝物を探すような感覚だなとよく思います。

各地を巡り、素晴らしい日本のアール・ブリュット作家と出会ったときには、心躍るようなゾクゾクする興奮があります。その制作過程や人間の創造する可能性の広さに毎回驚愕し、また「人に歴史あり」と言うようにそれぞれに背景が違い、表現のしかたも千差万別で、人の表現って「すごい」「面白い」としみじみ感じます。

現在、芸術の都パリにおいて（二〇一〇年三月二十四日から二〇一一年一月二日までの約十カ月間）、パリ市立アル・サン・ピエール美術館で日本人アール・ブリュット作家による大規模展覧会が開催されています。出展者は全国二十都道府県の作家六十三人で、彼らの多くに知的または精神の障害があります。作品点数は約八百点に上り、一カ月に約二万人が来館し大好評を博している展覧会です。日本のアール・ブリュット作品がここまで大々的に取り上げられた前例はなく、まさに歴史的な出来事とも言える展覧会です。（※2）

今後の日本のアール・ブリュット〈生の芸術〉の動向に関心を向けていただき、人の表現の根源的な凄みを多くの人に感じていただけたら幸いです。


（こばやしみずえ／アートディレクター）

作／澤田真一　撮影／大西暢夫

※1　アール・ブリュット・コレクション
Collection de l'Art Brut
ジャン・デュビュッフェが蒐集したコレクションをもとに、スイスのローザンヌ市に創設されたアール・ブリュットの総本山ともいえる世界的にも著名な美術館である。収蔵作品は三万五千点におよぶ。
※2 「アール・ブリュット ジャポネ展」ホームページ
http://www.art-brut.jp/

■日本のアール・ブリュット作品を紹介しているサイト
ウェブサイト美術館　スピリット・アートミュージアム
http://www.spiritartmuseum.jp

タヌキに化かされて!?

―秘境(?)の盆踊りレポート

野村 圭

昨年の笹普賢堂(香美市物部町笹)の宵祭りの様子

「タヌキに化かされたかもしれん!」

十年ほど前、高知市の男性は慌てて友達に電話したという。

山登りを楽しみ、くねくね道を帰る途中。いつも真っ暗な道に、一つだけ赤い提灯がぼわっと浮かび上がっていた。道の下からは、音楽や人の声が聞こえた。恐る恐る下りていくと、お堂で人が輪になり楽しそうに踊っていた。「よう来た。酒飲め、ご飯食べ」。勧められるままに食べ、一緒に踊った。だが、朝、目が覚めるとお堂には誰もいない――。

男性が迷い込んだのは、香美市物部町の山あいで、ひっそりと続く不思議な盆踊り。一昔前の音楽が大音量でスピーカーから流れ、集まった老若男女が、深夜まで踊りまくる。今年も町内五カ所で行われ、地元住民らが笑顔で、ふらふらになるまで楽しく踊った。

◆◆◆

この不思議な盆踊りを初めて見たのは、同町大栃で毎年八月十四日に開かれる奥物部湖湖水祭。取材に訪れると、やぐらの周囲を小学生から八〇代くらいまでの男女が、同じステップを踏んで踊っていた。大音量で流れるのは、「お富さん」や一九七〇年代後半から八〇年代に人気を集めたノーランズの「セクシー・ミュージック」など、洋邦楽さまざま。

あっけにとられていると、そばにいたお年寄りが「まあ、野外のディスコみたいなもんやね」とにんまり。五センチ以上ありそうなミュールを履いた若い女性も、いつも強面で話しづらかった男性も、さらには法被を着た市長まで笑顔でノリノリ!!大きな衝撃を受け、この日から不思議な盆踊りのとりこになってしまった。

それからというもの、物部町民に会うたび「お富さん踊れる?」「学校で習うが?」などと質問攻め。▼昔は町内の各地区で行っていた、▼七百年以上前から地元に伝わる踊り「ハッサン」や「バチバチ」が基本になっている、▼曲は四分の四拍子なら何でも踊れる―などが分かった。

「昔はほかに楽しみがなかったき、歩いて行ける範囲は踊りを追わえて行きよったね」「青年男女が夜会うて、朝まで踊る出会いの場やった。結婚した人もおった」と懐かしむ住民。端々に出てくる「出会い」という言葉にも引かれ、今年は各集落の祭りを回ることにした。

祭りを旧暦で行う地区もあるため、今年は七月下旬から約一カ月間がシーズン。湖水祭に加え、同町大栃の八王子宮、同町笹の笹普賢堂、同町久保堂ノ岡の観音堂、同町黒代の阿弥陀堂―の五カ所。どの地区も出身者らが帰省し、多いところでは人口の五倍以上の人数が集まる。

そのうち、ずっと途絶えることなく踊りが続いてきたのは、笹普賢堂の宵祭りだけ。徳島県や大豊町に近く、四十年ほど前までは県境を歩きで越えてやって来る人もかなりいたという。

この祭りでDJを務めるのは、「三十年前から青年団長」と笑う五十九歳の男性。昔は「口説き」や太鼓に合わせ、真剣を持って奉納踊りをしていたが、年々歌える人がいなくなった。

音楽はレコードやテープへ移り、男性も今年はテープ十八本とCD四枚を準備。いろいろな踊りに対応できるようそろえるが、主に流すのは三曲だけ。

「奥の方でしゆうのをわざわざ人が来てくれゆうき、あんまり曲を変えて踊れんなってもいかん。やっぱり午前〇時を越さな祭りにならんし、そこまでいなんようにするのは大変なんぞ」と苦悩を打ち明ける。

五十年ほど前までは人が集まりすぎて、階段を上がれなかったほどにぎわった祭り。しかし、近年は六人しかいないことも。前述の・化かされた・と思った高知市の男性が、インターネットのブログ(日記)で紹介し、全国から人が集まるようになったのは最近だ。

よさこい鳴子踊りではなく、宵祭りを目当てに神奈川や愛知県から来る若者たち。「地元にも大きな祭りがあるじゃいかって聞いたら、『自分が参加できるき、こっちの方が面白い』言うてくれて」とうれしそうに地元女性が教えてくれた。

DJ役の男性はお年寄り用に「まつのき小唄」(一九六四年)、若者用に「ビューティフル・サンデー」(一九七六年)を選曲した。「ほら、体操のお兄さんが歌いよった曲よ」と言われても、さっぱり分からない。

『物部村史』(一九六三年発行)には、「いづれも最新の音楽と踊りが取り入れられ、昔のおもかげを伝える踊りはない」と嘆く記述がある。だが、不思議な盆踊りで流れる曲がどの地区も一昔前なのは、先やりの住民が当時から変わっていないためのようだ。

雨に備えて設置したブルーシートの下で、輪になってくるくる踊った。「食べちょかな踊れんで」とおすしや手作りの豆腐を勧められ、写真を撮っていたら「早う踊らんか」。その言葉に甘えて、つい輪に加わると、楽しくて抜けられない。県外から来る若者が、笹地区を「ふるさと」というのにもうなずける。地元のおもてなしが祭りの大きな魅力になっている。

盆踊りシーズン締めくくりとなった八月下旬の阿弥陀堂では、さらに度肝を抜かれた。少し遅れて到着すると、道を悠々と塞いで輪になり踊る人々。さらに、事前に電話した時には、「近所迷惑やき、午後十時には終わる」と何度も念を押されたのに、ふと時計を見ると十時半。「あのう、十時までは?」「えっ、まだまだこれから、これからよ」と答えた女性は、大泉逸郎の「これから音頭」に乗せ、踊りながら遠ざかっていった。

盆踊りシーズンを終えて満足していると、「こないだ踊りに来てなかったね」と地元住民に声を掛けられた。実は六カ所だったのかと悔やんでいると、「大栃小中学校の運動会よえ。運動場でみんなあで踊ったで」とにこにこ。物部の盆踊り制覇の道のりは、まだまだ遠そうである。

(のむらけい/高知新聞香長総局記者)

今年の奥物部湖湖水祭で、地元の女性に踊りを習う若者たち

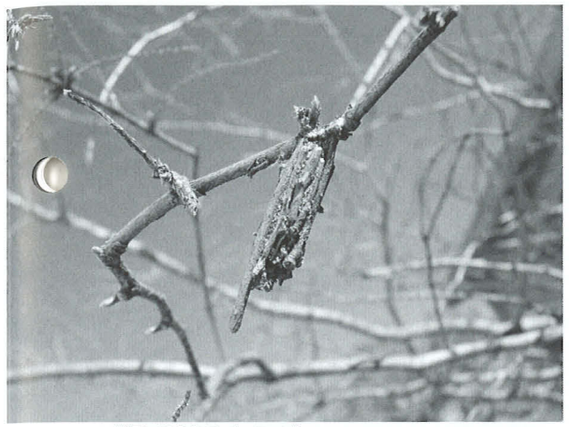
今年の笹普賢堂でのおきゃく

59歳のDJ。選曲にも苦心する

冬の風物詩・ミノムシはどこに行った？

荒川 良

個体数の減ったオオミノガ



普通に見られるチャミノガ

オオミノガヤドリバエ成虫

いなくなったオオミノガ

ミノムシを知っていますか？と問うとほとんどの人がイエスと答える。では最近ミノムシを見たことがありますか？と問うと、多くの人が首をかしげ、「そういえば最近見ないなぁ」という答えが返ってくる。

日本の冬の風物詩であるミノムシ。清少納言の枕草子でも「みのむしいとあはれなり」と詠われるなど、古典の季語としても使われる私たちにはなじみの深いミノムシ。ミノムシはミノガ科というガの仲間に属する昆虫の総称である。幼虫が葉や小枝で綴ったミノで体を包んでいることからその名がつけられている。

日本にはミノガ科に属する種類は三〇種類ほど知られているが、身近なミノムシはオオミノガ、チャミノガなど数種類である。中でもオオミノガは大きいものでは5㎝を超えるミノを作って冬を越す。葉の落ちた木の枝にぶら下がるのでよく目立つが、近年全国的にこのオオミノガを見ることが難しくなってしまった。

ミノムシの生活

ミノの中で老熟した幼虫の状態で冬を越したオオミノガは、春になってもほとんど摂食することなく過ごし、初夏の頃にミノの中で蛹になる。

発育中の幼虫はミノの上部に頭部を向けているが、蛹になるときはミノの中で体を反転させ、逆立ち状態になってから脱皮する。やがてオスはミノの下から体を半分ほど外に出して羽化し、飛び立っていく。メスはミノの中に入ったまま羽化するが、羽化した成虫は羽も脚もなく、とてもガとは思えない形状をしている。

オスは飛び回ってメスを捜し、メスの入ったミノを見つけると、腹部をミノの下端部から差し込む。オスの腹の長さは1㎝程度なので、メスの腹部末端（ミノの上方）にある交尾器まで、オスの腹部末端にある交尾器はそのままでは届かない。ところが、オスは空気を体に取り込み、腹部を伸ばしていって、メスの交尾器にまで到達させるという芸当を持っているのである。

こうして交尾が成立し、しばらくするとメスの産卵が始まる。メスはミノの中の蛹の殻の中にいる状態で、その殻の中に卵を産み付ける。殻の上部からだんだんと卵が充満していき、それにともなってメスの腹もどんどん縮んで、殻の中が卵で満たされる頃、1㎝未満に縮んだメスは自らミノの外に落下し、生涯を終える。メス成虫にとっては、ミノの外の世界を知るのはこのときが初めてである。

産卵が終わってから二週間ほどするとミノの中の卵が一斉に孵化し、千頭を超える幼虫が糸を引いてミノの中から出てくる。このとき風が吹くと、幼虫は風に乗ってかなり遠方にまで飛ばされる。このような形で孵化したばかりの幼虫は分散し、たどり着いた場所で直ちにミノを作って、「ミノムシ」としての幼虫生活を送るのである。

オオミノガの天敵の侵入

二十世紀末に、中国の山東省では、果樹の害虫オオミノガ対策として、中国南部からオオミノガに特異的に寄生するオオミノガヤドリバエという寄生バエを大量に放飼してオオミノガ個体群を減少させる害虫防除法が実施された。

時期を同じくして、これまで日本では記録されていなかったオオミノガヤドリバエによるオオミノガの被寄生個体が九州や近畿地方で相次いで発見された。高いときには90％を超える寄生率が認められ、気がつくとこれらの地域ではオオミノガをほとんど見ることができなくなってしまった。

一九九九年冬、高知県内でオオミノガのミノを千個あまり集めて調べたところ、オオミノガヤドリバエによる寄生率は29・5％であり、この時点では近畿や九州と違ってオオミノガは絶滅状態には達していないことが分かった。ところが翌二〇〇〇年には寄生率が90・3％と急上昇し、高知市や南国市ではほとんどオオミノガを見つけることができなくなってしまった。

しかし、高知県の東部や西部に限って見ると寄生率が30％を割るような地域も見られ、二〇〇一年にはこの東部西部を中心にオオミノガを集めて調べると、寄生率は65・1％であった。その後二〇〇三年まで調査を続けたが、寄生率は65％前後であり、高知市内や南国市でもかつてよりは遙かに少なくなったが、オオミノガを見つけることもできた。

オオミノガヤドリバエを迎え撃つ土着天敵

持ち帰ったオオミノガのミノの中を調べると未羽化のオオミノガヤドリバエの囲蛹（いよう）（ハエ類は蛹化時には終齢幼虫の殻の中で蛹になるため、このように表現される）が見つかることがある。これを飼育しているとオオミノガヤドリバエではなくて、ハチの仲間が羽化してくることがあった。

オオミノガヤドリバエはオオミノガに寄生するが、これらのハチはオオミノガヤドリバエに寄生する寄生蜂である。寄生蜂は八種類確認されたが、唯一名前の分かったものはキアシブトコバチというチョウヤガ、ハエの蛹に寄生するきわめて普通の寄生蜂で、この種の寄生率が最も高かった。他の七種は寄生率も低く、種名の確定には至っていない。

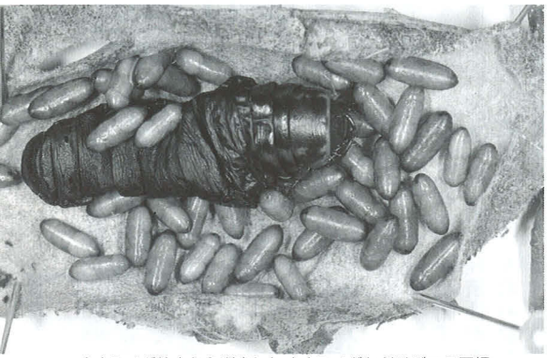
オオミノガヤドリバエが高知で確認されてから十年近くになる二〇〇八年から改めてオオミノガの県内の生息状況を調査しているが、オオミノガはかつてのように普通には見られないが、確実に生息を続けており、オオミノガヤドリバエによる寄生率も相変わらず高く、またキアシブトコバチなどによってオオミノガヤドリバエも寄生されていることが確認できた。

植物とそれを加害するオオミノガ、それに寄生するオオミノガヤドリバエ、さらにオオミノガヤドリバエに寄生する寄生蜂という食物連鎖が成立しているのである。

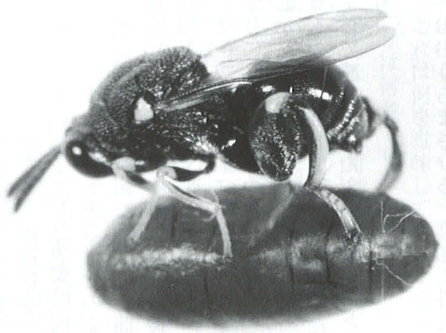
環境破壊などでオオミノガが減少している中、オオミノガに特異的に寄生するような虫が侵入するとオオミノガは一時的に絶滅に瀕することになる。大都市でオオミノガが見られなくなったのはオオミノガがすでに減少傾向にあったためかも知れない。そうでなければ、ある程度時間が経過すると侵入種オオミノガヤドリバエを攻撃する土着の天敵も働きだすのである。高知はまだ大都市ほど環境が破壊し尽くされていないので、このような生物の相互関係が成立したと考えられる。

この冬、オオミノガのミノがぶら下がっていないか、散歩がてら捜してみてください。

（あらかわりょう／高知大学農学部教授）



オオミノガ幼虫から脱出したオオミノガヤドリバエの囲蛹



オオミノガヤドリバエ囲蛹に卵を産み付けるキアシブトコバチ

鉄道っておもしろい！⑤

一度に集めて一度に散らす

大内 雅博

鉄道による旅行時間の短縮には、走る速度の向上よりもむしろ列車本数の増加が効率的であることを前回説明した。今回はさらに、列車どうしの待ち時間の短縮について説明したい。

そもそも鉄道はクルマとは桁違いに大きい輸送単位により経済性が成り立つ交通機関である。人間の数だけ設定の可能性のある、すべての移動の起点と終点の組み合わせに対応する列車を設定することは不可能である。別の言い方をすれば、一本の列車に乗るだけで移動が完結することは稀であり、複数の列車に乗車することを前提とした仕組みが整っていなければならない。

以上、面倒な言い方をしたが、要するに、鉄道の利用には乗り換えが付きまとうということである。数分ごとに電車の来る東京や大阪などの大都市圏では乗り換えの際の待ち時間など気にもならないが、需要が少なくて列車本数を多くできない地方部ではそうはいかない。乗車時間より待ち時間の方が長かったという経験をお持ちの方も多いと思う。

特急と各駅停車との接続、異なる路線どうしの接続、さらに駅でのバスとの接続など、接続時間の短縮は鉄道ダイヤ編成の永遠のテーマの感さえある。ある箇所の接続を改善すれば、別の個所で接続が悪くなることがある。いわば、「あちら立てればこちらが立たず」である。

では、どうするか。答えは「一度に集めて、一度に散らす」ということである。乗換え駅（接続駅とも言う）において、接続関係にある列車を同時に到着させ、数分後の停車中に乗客が乗り換え（その組み合わせは当然複数ある）、それが済んだら同時に出発するというものである。

実際にこの方法を実践しているのがスイスの主要駅である。スイスの列車ダイヤが各路線・各等級の列車とも30分間隔が基本で、需要の少ないところでも60分間隔で走っている。これだけでも我が国の地方部と比較すればずいぶん便利だと思うが、とにかく乗り換えの際に待たされることがない。乗り換え駅で下車すると、とにかくいろいろな列車が集まっていて、待たずに乗れるからである。

ただし、そのための前提条件が二つある。

一つ目は、接続列車の数だけ駅の線路数が必要なことである。これについては、乗り換えとなる駅はもともと規模が大きいので、少し改良すればホームは増設できる。

二つ目。接続駅間の所要時間が30分の倍数を少し切るぐらいの所要時間でなければならない。いわゆる「接続タイム」は、すべての接続駅で同時多発的に行われる必要があるからである。スイスでは基本的に毎時00分と30分の数分間が「到着タイム」で、後ろ数分間が「出発タイム」となっている。ただし、区間によっては45分とか75分という所要時間になってしまう場合もある。そのような場合、その接続駅での発着時間を毎時15分と45分を中心とする前後数分間としている。

と、文章であれこれ説明しても分かりにくいと思うので、写真を二枚お示しする。とはいえ、是非こういうものは体験して、そのありがたみを体で感じていただくのが良いと思う。

（おおうちまさひろ／高知工科大学准教授）

ビール/ビエンヌ駅の出発時刻表(2枚の写真から再構成して表示)。毎時16本の出発があるが、すべて毎時15分または45分の近辺に固まって出発する。

ビール/ビエンヌ駅の「乗り換えタイム」。7本の列車が既に到着。あと1本の到着後、8本の列車が次々に発車する。

言葉の現場から 24

「竜馬がゆく」のなぞを読み解く

広井 護

司馬遼太郎の「竜馬がゆく」と夏目漱石の「こころ」は、大学生の〝感動した本ベストテン〟に必ず入る名作である。だが作品の性格は、全く異なる。

けれどもこの両作の読後感が、なぜかよく似ていると、生徒から聞いたことがある。そのときは、とっぴな感想だと思って聞き流した。

ところが最近、私自身が両作品を読み返す機会があり、同じ感想を持った。何かが似ているのである。

これはどうしたことだろう。考えるうちに一つの仮説が浮かんだ。

「竜馬がゆく」と「こころ」は、物語構造が似ているのである。そのポイントは「師弟関係」だ。

「勝海舟―竜馬」の関係と、「先生―私（話者の青年）」の関係は、非常によく似ている。

なぜ、これまでそのことに気がつかなかったのだろう。

「勝海舟、坂本竜馬」は政治的人間である。政治的に生き、政治的に死んでいった人物として描かれている。けれど「先生と私」は、非政治的、非社会的に生きる内面的人間として造形されている。別次元の物語としか思えなかったのは、そのためである。だが、「社会性」を捨象して、二作品を比較すると、類似性がはっきりする。

「勝海舟―竜馬」の関係を五十年スライドさせると「先生―私」の関係になるといってもいいだろう。

「竜馬」も「私」も、地縁血縁関係を超えたまったくの他者を、師とあおぎながら、自分探しを行っている。政治青年の自分探しと哲学（文学）青年の自分探しは、ずいぶん様相は異なるが、自分探しである点では同じである。

どちらも「押しかけ弟子」だが、弟子となるために大きな犠牲を払っている。竜馬は家族を捨てて脱藩し、「私」は危篤の父を見捨て、先生の手紙をふところに上京してゆく。

幕臣勝海舟は、江戸城を無血開城して徳川幕府を終わらせ、一種の政治的自殺を決行する。（竜馬の死後のできごとだが、「竜馬がゆく」中でも言及される。）一方先生は、明治の精神に殉じて自ら命を絶つ。

まったく傾向の異なる二つの物語になぜこういう類似点が見い出せるのだろう。

それは二つの作品が同じテーマ「青年期」を描いたものだからではないだろうか。

坂本竜馬は、「青年期」と呼ばれる人生の一時期を、日本で最初に生きた人物である。

それまで日本には、二種類の人間しか存在しなかった。「子供」と「大人」である。子供時代が終わると、即座に大人になり、大人としての責任が課せられる。子供でもないし、大人でもない――そういう人間は存在しなかった。

ところが、竜馬の成長の仕方は特異である。大人にならないのである。かわりに大きく揺れる。自分が何者であり、何をなすためにこの世に生まれてきたのかを、迷いつつ模索し続ける。これが「青年期」だ。

そのプロセスで、師勝海舟との出会いがあり、学びがある。さらに別れがあり、師に対する一種の乗り越えもある。

このプロセスは、「こころ」における「私―先生」の関係と、酷似している。

これは何を意味しているだろう。

「今は何者でもないけれど、何者にでもなりえる可能性を生きる人生の一時期」――つまり「青年期」を描いた二つの典型的物語――それが、「竜馬がゆく」と「こころ」だということではないだろうか。読後感が似ているのはそのせいだろう。

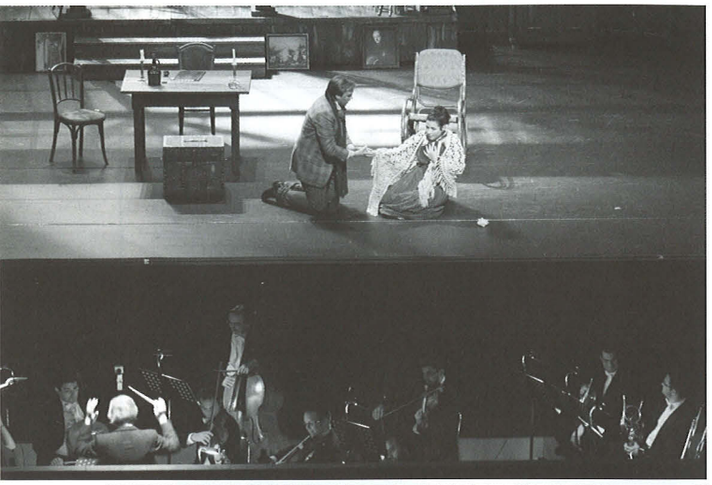
坂本竜馬は本当に偉かったのだろうか。薩摩藩に雇われたたんなる工作員にすぎなかったのではないか――等の見解も出されている。ブームのせいで、竜馬株があまりに上がったため、逆に暴落の危惧も感じられる。

けれど、仮に竜馬の政治的業績が無だったとしても（もちろんそんなことはありえないが）竜馬が日本で最初に「青年期」を生きた人物であるということ、これは動かざる事実である。それは竜馬が実際に書き残した――そして「竜馬がゆく」中で、繰り返し引用される――多くの手紙によって実証されている。

「竜馬がゆく」という物語には、〝日本の青春〟の原型が刻まれている。この作品が日本人に愛されてやまない本当の理由はそこにあるのではないだろうか。

（ひろいまもる／土佐高校教諭）

バーデン市劇場 オペラ「ラ・ボエーム」



9月15日（水）かるぽーと大ホール

ウィーン近郊バーデン市劇場の今回の演目は、プッチーニのよく知られた作品で、19世紀のパリ、屋根裏部屋にすむ若い芸術家と娘たちの物語。美しいヒロインに死が訪れる悲しいラブストーリーです。

オーケストラピットの生演奏と舞台上の出演者の演技が相まって、本場ウィーンオペラの雰囲気をうまく伝えていました。観客も自然に感情移入できたようで、4幕では涙をぬぐう方も散見されました。

アンケートでは「舞台が洗練されていた」「出演者の歌唱力が素晴らしい」など、好評をいただきました。

同劇場の高知公演は5回目を数え、公演をお休みした昨年は問い合わせが相次ぐなど、一定のファン層がいることを窺わせました。また次回公演が期待されます。

宝くじ文化公演　わらび座ミュージカル「アトム」

10月6日（水）かるぽーと大ホール

わらび座ミュージカルの手塚治虫作品を原案とした第2作「アトム」は、十万馬力の鉄腕アトムの時代は終わった未来の時代、人間とロボットの境界を越え、互いに認め合って生きていくことの大切さを謳うミュージカルとなりました。

脚本・演出に劇団扉座の横内謙介、振付にラッキィ池田があたるなど、わらび座のまたひと味違う面を見せてくれました。

アンケートでも、「人の熱い思いや愛は人を動かすものです。熱い思いがこみ上げてきました」「このミュージカルがたくさんの人に観てもらえると平和に近づくと思えました」など、多くの感激の声が寄せられ、手塚さん、そして制作スタッフがアトムに込めたメッセージが伝わったようでした。

なお、この舞台は2年前に上演した「火の鳥・鳳凰編」に続き、宝くじの助成により“宝くじ文化公演”として特別料金で提供することができました。

高知市文化振興事業団

9月～10月の事業から

うたおう！おどろう！アフリカ アフリカ♪

9月23日（木・祝）かるぽーと小ホール

猛暑がまだ残る秋分の日、3歳以上の親子（もちろん大人だけでもOK！）を対象にした演奏会「うたおう！おどろう！アフリカ アフリカ♪」を開催しました。

開演前のロビーでは、アフリカのお札に描かれている動物のお面を作ったり、アフリカ風のフェイスペインティングをして気分を盛り上げました。中には子どもより熱心に南国らしい原色いっぱいのぬり絵をしているお母さんもいたりして。

会場がフッと暗くなり、指の穴のない笛を演奏しながらロビンさんが現れると、やや呆然とした子どもたち。でも、面白いお話と、見たことのない楽器、その音色にすぐにアフリカの世界に引き込まれていきました。

2部はジョゼフさんとtomomiさんを中心に進んでゆきます。2人の太鼓と会場の手拍子で会話をしたり、踊ったり、歌ったり。「若い頃アフリカで暮らしたことがある。とても懐かしい」と、鮮やかな布を腰に巻き熱狂的なダンスを披露する年配の女性も。きまりのない自由で陽気なアフリカ音楽を、子どもも大人も会場一体となり満喫しました。

演奏会終了後、会場の出口にジャンベ（太鼓）を用意しました。みんな興味津々。何度も戻ってきて叩いてみる子どもが大勢いました。

高知を撮る

第26回写真コンテスト入賞作品

渡し舟

（昭和35年11月　高知市 タナスカ）

岡田　文夫

桟橋からタナスカへの渡し舟。
後方の白煙はセメント工場。

「風景のアイデンティティ」

風俗歳時記

出歩きが好きというわけではないが、ちょっとした気分転換などに、街に出て歩く。特別な用務や買い物があるわけではないので、先を急ぐこともない。こうして歩くには、どちらかというと、繁華街より裏町がいい。横丁や路地に入るとさらにくつろぐ。少しごちゃごちゃしていて、生活の陰影の間のよさや、人のゆったりとした動きが、緊張感をやわらげてくれる。その昔永井荷風は、路地は「小説的世界」だといったが、いまもそれは変わらない。

われわれが〈まち〉に求めるものは、単なる利便や機能、つまりハイテクの集合物ではない。もちろんそれも必要だが、それだけではあまりにも無機的で精神の乾燥した都市になってしまう。もっとヒューマンなものが求められていることは確かだ。

そうした都市の有り様を、最もわかりやすく示しているのが、その都市の風景である。とはいえ単なる景色を〈風景〉とはいわないように、われわれはただ形の美醜をフィジカルに見ているのではない。一般に歓迎される観光的風景では、珍しいこと、際立つこと、人目を引くことが求められるのだが、所詮これは旅行者の目を楽しませるものである。

都市景観には「見る」景観と「生きる」景観があり、その構成要素としては町並みや建物など人工的環境と、公園やみどり、水辺などの自然環境があるといわれるが、一番大切なのはその都市の持つ歴史や文化がアイデンティティになって、風景の隠し味になっていることである。これが都市の風格をつくるのだ。

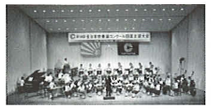
さて今年の夏は特別暑く、歩くのに日陰がほしい思いを強くしたのだが、身近な話に戻って、はりまや橋から本町五丁目までの電車通りは、高知の顔ともいうべき通りだろうが、あらためてあの歯抜けで樹種不揃いの街路樹を見ていると、どこに「みどりの都市高知」の誇りを感じさせるものがあるのかと戸惑ってしまう。

（蒜）

MUSIC STREAM 2010

ミュージックストリーム 2010

この1年、四国・全国において活躍した地元高知の音楽団体がかるぽーとに集結。
実力ある県内音楽団体の熱い演奏をお楽しみください。



高知西高等学校吹奏楽部
第58回全日本吹奏楽コンクール
四国支部大会金賞受賞　全国大会出場

高岡中学校吹奏楽部
第58回全日本吹奏楽コンクール
四国支部大会最優秀賞受賞
第16回日本管楽合奏コンテスト全国大会出場

土佐女子中学高等学校コーラス部
第77回NHK全国学校音楽コンクール四国大会金賞受賞
第63回全日本合唱コンクール四国大会金賞受賞
共に中学生の部 全国大会出場

日時：12月23日(木・祝) 17:30開場18:00開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと大ホール

一般前売＝1,000円（当日＝1,200円）　高校生以下前売＝500円（当日＝600円）
お問い合わせ：財団法人高知市文化振興事業団　088-883-5071

風伯

観光客はありがたいか

数日前、友人と連れだって瀬戸内のある島を訪ねた。海鮮の店でお昼を食べるのも楽しみにしていた。インターネットの書き込みも評判がよく、開店の十一時半にはすでに行列ができていた。否が応でも期待は膨らむ。すぐ後ろの人は「テレビにも紹介されたからねえ」と話している。

ところが、やっと順番が来て注文したものが出てきたとき、一瞬目を疑った。想像していたものとはまるで違う。口に含んだときもみんなで顔を見合わせてしまった。実にまずかったのである。

観光客というのは所詮こんなものを食べさせられるのであろう、自分は何を期待していたのかと反省した。二度と行きたくないし、他の客も「いっぺん懲り」だろう。それでも次から次と来る新しい観光客を相手にしていれば、商売は成り立っていく。自分の住んでいる地域の店や人がそんなふうに一回限りの客を相手にするようになっていくのには耐えられない。

いま高知は龍馬ブームで賑わっているようであるが、観光客に「どっさり」来てほしいのは、その人たちの落とすお金を目当てにしているからだろう。しかし懐が肥やせるのは一部の人たちであって、ほとんどの住民は観光客の落とすお金には縁がない。

通り過ぎるだけの観光客を相手にしていると、自然に品質が落ちてくるというのはよくいわれる。だとすれば、観光客の落とす利益に比べ、「品質」の損失はあまりにも大きいことになりはしないか。

（霖）

文化高知

定期購読のご案内

賛助会員募集中！！

賛助会費
2,000円
（年額）

財団法人 高知市文化振興事業団の
機関誌「文化高知」を
年６回お手元に。

お申し込みは・・・
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

お申し込み・お問い合わせ
（財）高知市文化振興事業団
Tel　088-883-5071
毎週月曜休業（祝休日は除く）

今号の表紙

「waiting am11:57」

阿部鉄太郎

本作のテーマは、何かを待つひとりの女性です。「時」を待つのか、「人」を待つのか、色々な事が作品の眼差しの向こうに想像できます。

作者としては、作品を見にきて下さったひとりひとりの方に、感謝の意をこめて「お待ちしておりました」と伝えられれば幸いです。

（あべてつたろう）

文化高知 No.158 2010年(平成22年) 11月1日発行 [隔月発行]
財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

第5回 *Concours des Tableaux* 企画展

横田 章 展

2010.12.7(火)〜12(日)

高知市文化プラザ かるぽーと 7階・第5展示室 入場無料

am9:00〜pm7:00(最終日 pm5:00まで)

主催:(財)高知市文化振興事業団　お問い合わせ:〒780-8529 高知市九反田2-1 TEL:088-883-5071 FAX:088-883-5069

第6回美術作品コンクール

CONCOURS des Tableaux

高知市文化プラザでは、若手の美術作家を支援するために、美術作品コンクールを開催します。
これは、芸術文化を創造する人材を積極的に支援・育成することを目的とする事業です。
フレッシュな感性、情熱あふれる作品をお待ちしています。

●審査員
植松由佳氏(国立国際美術館主任研究員)

●対象
平面作品(壁にかけられるもの)。書、写真は対象外。

●資格
県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(平成23年4月1日現在)。

●規格　260cm×260cm(枠・額を含む)以内の作品2点まで出品可(未発表作品に限る)。
枠装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)。出品料無料。
※1)展示作品の天災、不可抗力、いたずら等による損害について主催者は責任を負えません。
※2)作品に水、生花等生ものの使用を禁止します。
※3)枠装、額装などに不備のある作品は、受付できない場合があります。
※4)展示後の作品は、加筆、撤去、配置替え等を行わないことを原則にします。

●日程
作品搬入:1月15日(土)・16日(日)9:00〜17:00
一般鑑賞:1月18日(火)〜23日(日)
高知市文化プラザかるぽーと　第1・第2展示室
公開審査:1月23日(日)14:00〜16:00(表彰式16:00〜)

●賞
最優秀作1点賞金30万円、優秀作2点賞金各5万円を贈呈。
また、最優秀賞受賞アーティストは、受賞後概ね1年以内に市民ギャラリーにて、(財)高知市文化振興事業団主催の企画展を開催することができるものとします。

●応募方法
所定の申し込み用紙(高知市文化プラザをはじめ、県内文化施設にて配布中。またホームページからダウンロード可)に必要事項を記入の上、作品の写真(制作中のものでも可)を添付し、1月5日(水)17:00までにお申し込み下さい(郵送・持参いずれも可)。
これ以後も搬入日まで受付を行いますが、その場合には展示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。

●お申し込み・お問い合わせ先
〒780-8529　高知市九反田2-1
(財)高知市文化振興事業団「美術作品コンクール」係
TEL 088-883-5071